京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

2023　年　07 月 25 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　藤　　洋 作　様

所属部局・研究科　教育学研究科

職 名・学 年　博士後期課程2回生

氏　　名　張　蕾

助成の種類	令和５年度　・　国際研究集会発表助成		
研究集会名	個人差の研究国際学会		
発表形式	☐ 招待　・　✓ 口頭　・　☐ ポスター　・　☐ その他（　　）		
発表題目	強迫性障害とパーソナリティ特性のビッグ・ファイブとの関連：メタ分析の結果から		
開催場所	イギリス・北アイルランド・ベルファスト・ベルファスト女王大学		
渡航期間	2023 年 07 月 14 日　～　2023 年 07 月 23 日		
成果の概要	**タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版１枚程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　☐ 無　☐ 有（　　）**		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000 円	
	使用した助成金額	350,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳（差し支えなければ要した経費総額をご記入ください）	費目	金額（円）
		航空券代（一部）	350,000
		宿泊費	
		滞在費	
		学会参加費	
		その他	
		以上に助成金を充当	
当財団の助成について	（今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。） この度は貴財団の助成を受けることとなり、心より感謝申し上げます。この助成は、特に大学院生にとって国際会議参加のハードルを下げる上で重要な役割を果たしていると考えております。若手研究者の支援に継続的に努めていただけることを願っております。		

成果の概要／張蕾

教育学研究科　教育学環専攻　博士後期課程 2 回生

１．個人差の研究国際学会とは

個人差の研究国際学会（International Society for the Study of Individual Differences）は、パーソナリティー、知能、遺伝、感情などの個人差の測定などに焦点を当てた研究を報告することを中心に、隔年で行われる学術集会である。コロナの影響により、今回の会議は 4 年ぶりに開催された学会であり、世界中から研究者が集まった。会議は 5 日間にわたり、基調講演、論文講演、シンポジウム、ポスターセッション、およびこの分野の受賞者による講演が大体毎日設定された。参加者には院生だけでなく、さまざまな専門分野の若手教師や教授も含まれており、同輩とコミュニケーションをとることができるだけでなく、専門的な指導を受けることもできた。この学会から多くの経験を得ることができた。

２．会議への参加を通じて

報告者は、大会 3 日目に開催された論文講演「Personality and Mental health」に参加し、「The relationship between obsessive-compulsive disorder and big five personality traits: A meta-analysis」という題目で報告した。この研究は、obsessive-compulsive disorder（強迫性障害、OCD）とビッグ・ファイブのパーソナリティー特性との関連をより包括的に検討することを目的としたものである。報告では、これまでの研究では明確に示されていなかった OCD とビッグ・ファイブとの関連を明らかにした。具体的には、21 の先行研究と 26 のデータセットを利用し、のべ 29,660 人の参加者を対象にメタ分析を実施した。報告の結果から、神経症傾向が高い人ほど OCD の得点が高いことが示された。一方で、外向性や協調性が高い人ほど OCD から守られる役割を果たす可能性があることが明らかになった。これらの知見は、OCD の症状を持つ個人への予防的介入の可能性がある

ことを示唆している。

以上の論文を無事に完成し、データ解析に関する皆様の詳細な質問に答えることができ、今後の研究の方向性についても貴重なコメントをいただいた。特に、私の分析手法はメタ分析分野の専門家である Jacek さんによってチェックされた。また、皆様から肯定的なコメントをいただき、今後の研究に対する自信とモチベーションを得ることができた。更に、多くの研究発表に出席し、個人差の分野における新たな進歩や新たな視点を理解することができ、今後の自分の研究に対するインサイトを得ることができる。これは非常に重要なことであり、私の研究分野に非常に近いチームを見つけ、将来的に協力する可能性が高いと言えるでしょう。最後に、参加者とのネットワーキングを通じて、将来の学術的キャリアにつながる人脈を築くことができた。この学会での経験は、私の学問的キャリアにおいて重要な一歩となった。そして、この学会へ参加できるように支援いただけたことに大変感謝している。